

# 校長室だより

第91号

発行日 2015年 3月 3日

発行者 桐光学園小学校長 斎藤滋

子ども間で起きる様々なトラブルについて保護者から連絡をいただくことがあります。

子どもが意地悪をされた。電車の中で乱暴なことをされた。物をとられた。物をかくされた。無視された。悪口を言われた・書かれた。メールで傷つくようなメッセージが送られてきた。どれも、子どもだけでなく保護者も心配になるようなことです。

このように起きる様々な子ども間の問題は、子ども同士で解決できるものもありますが、教師や保護者の支援、指導が必要なものもあります。あるとき、一方の保護者からの連絡を受けてその事実関係を調査している中でもう一方の保護者から「私は学校を信頼して、これまで小さなことは問題にすることなく家庭の中で子どもと話し合いながら解決してきた。しかし、今回のようなことは、まさに“言ったもの勝ち”、“我慢している人が損をする”というものではないのか」と言われました。そのように思われるような対応をしてしまったことを反省し、学校の対応について考えさせられました。ただ、学校では保護者や子どもからの訴えがあればまずはそのことに耳を傾けてそこを出発点として対応をしていくことになります。だからこそ、より慎重な対応が必要になります。そのときは、訴えてくる保護者が自分の子どもが言うことを正しいと信じ切っていること、学校側が解決を急ぎすぎるばかりに対応に慎重さを欠き、十分な聞き取りができないことなどが重なってしまったことでかえって問題の解決を遅らせてしまい、どちらの子どもにも心に大きな負担をかけてしまうことになりました。

比較的表面に出にくいことの一つにメールのやりとりがあります。最近ではラインやゲーム機の通信機能を使ったメッセージのやりとりもあるようです。このような方法でのやりとりの中には内容によってはいじめと考えられるようなものもあります。子どもの世界に起きるさまざまなトラブル、さらにはいじめについて考えているときに、川崎市内で中学1年生の男子が命を奪われるという事件が発生しました。まだ詳しいことは分かっていないようですが、今回の事件が起きる前からその子が暴力を振るわれていたことや学校を休みがちであったことは分かっているようです。子どもたちの中で何が起きているのか。いじめという用語で覆われるあまりにも理不尽で残酷な世界。私たちにとって、保護者の皆さんにとって、さらには子どもたちにとっても考えさせられる事件であると思います。

子どもたちの生活を見ていると、少し規範意識の低下が感じられることがあります。その環境の中で生活している子どもたちの心はどうなっているのかなと気になることがあります。そして、そこに見られる集団にはときに独特の雰囲気が作り出され、一人だったらしないようなことでも複数の仲間たちと一緒に、いけないことだと意識できる力が人数分の1になってしまっているようにさえ感じことがあります。また、一度このような意識を持つと一人になることが不安になり、集団でいたくなることが多くなるように見えます。さらに、その中ではときに誰かがいじめやからかいのターゲットになることもあります。その集団の中の子どもたちは自分がそのターゲットにならないようにするために、常にアンテナをはっていなければならず、またそくならないようにするために特定の子をいじめる側に入ってしまったり、時には見て見ぬふりをする傍観者になってしまったりすることがあります。「自分はそういうことはしたくない。自分たちは間違ったことをしている。」そう感じてもそれを表現できないことが続きます。もちろん他の子や親、先生にそんなことを言えば、「チクリ」と称していじめの対象が自分になるのではないかという恐れを抱くこともあるようです。

いじめがそのターゲットを変えながら続いているのは、どのような子どもたちの弱い心、いじめられたくないという子どもの心をお互いに理解し合うことができないことが原因なのかもしれません。

日常の子どもたちとの会話、遊び、その他の活動を共にすることで、子どもの今に気づく力を私たちは持たなければなりません。限られた時間しか共に生活しない教員もそういう目を持って子どもに接していくことが求められています。

家庭では、多くの気づきのチャンスがあると思います。

朝なかなか起きてこない。起きたと思ったらトイレに頻繁に行く。学校に行こうとすると気分が悪くなる。夜眠れない。お金を持ち出すことがある。家で買っていない物を持っている。会話が成立しない。何か聞いても「別に」とか「平気」というような言葉（親に心配をかけたくないから）しか返ってこない。小学生ですから夜出歩くというようなことはないと思いますが、例えば習い事の帰りの時間が遅くなることが続くようなことがあれば何か理由があるのかもしれません。携帯電話を持たせていれば安心というようなことはこのような場合は全くなく、かえって心配が増えてしまうほどです。

子どもたちには、親に気づいてほしいと思っていること、先生に知ってほしいと思っていること、友だちに伝えたいと思っていることがあるのではないでしょうか。

子どもたちにサインを出し続けましょう。

「いつでもあなたの味方だよ」「いつもで話を聞くよ」「なんでも話してごらん」と。

そして、家庭と学校が一つになって、連絡を取り合いながら子どもたちの今に向き合っていきましょう。